Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-15

台湾「同志文学」における日本

劉, 靈均

(Degree)
博士（文学）

(Date of Degree)
2020-09-25

(Date of Publication)
2022-09-25

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲第7832号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007832

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

台湾「同志文学」における日本

氏　名：　劉　靈均

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名　（主）濱田　麻矢　教授
（副）平井　晶子　教授
（副）朴　鍾祐　　教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

台湾「同志文学」における日本
論文要旨

本論文は、台湾の「同志文学」を「日本」表象の視点から分析し、そのジャンルが持つ越境と連帯の可能性について考察したものである。

2019年5月、アジアで初めて台湾で同性婚が法制化された。これは「戒厳令」が解除された1987年頃から現在まで約30年にわたり展開されてきた女性解放運動や性的マイノリティ運動の成果ひとつと考えられる。その背景には、「同志文学」という社会性の強い文学ジャンルの影響があった。「同志文学」は性的マイノリティの社会運動と支え合いながら、豊富な文化コンテンツを蓄積し、平等権を獲得することで、他の中国語圏の地域に影響を与え合うようになった。

台湾の「同志文学」は、中国語圏の影響を受けながら生成されたものである。また、「戒厳令」の解除後に欧米（主にアメリカ）から輸入されたフェミニズム、ジェンダー理論、クィア理論などの影響も強い。特にアジアより遥かに性的マイノリティに「寛容」であるアメリカに対する憧れが強かったため、これまで欧米からの影響が多く論じられてきた。

しかし、台湾で50年の植民地支配を行い、戦後も絶え間なく台湾の文化に広く影響を与えてきた日本の文学と文化の影響は、「同志文学」研究においてほとんど論じられることがなかった。言及がなされた場合でも、日本は「可視性が低い」とされたり、あるいは「東方」についての描写の一部だと見なされたりしてきたのである。

近年は、アメリカからの影響だけでなく、中国女性の同性間の性的欲望や近代中国の男色との関係にも注目が集まっている。しかし日本との関係については、垂水千恵が邱妙津作品と安部公房や村上春樹作品の関係性、および紀大偉の小説と大島渚の映画の関係性について提起したものの、これまで系統的な研究はなされてこなかった。しかし終戦まで50年も台湾を植民地として統治し、戦後も様々な文化を台湾に輸出してきた日本が、性的マイノリティの文

ㄱ化という文脈においてだけは欠席するというのは、いかにも不自然である。

本論文では、前述した台湾「同志文学」と日本の複雑な関係性に目を向けながら、白先勇、呉継文、李琴峰、楊邦尼という四人の作家の作品を取り上げる。彼女／彼らのテクストと日本表象や日本文学のと、これからの「同志文学」の発展性について考察した。

序章では、まず台湾の「同志文学」というジャンルについて概略的に紹介し、先行研究がいかに日本の要素を等閑視してきたか、さらに筆者がなぜ「日本」に着目するかについて説明している。

第1章「白先勇『孽子』における日本表象：「同志文学」における多文化共生」は、「同志文学」のカ

ノンとされてきた白先勇『孽子』(1983)における「日本」表象について分析したものである。これまで、『孽子』に関する研究は他の「同志文学」研究と同じく、ほとんど中国との関係性およびアメリカの影響を論じることに終始してきた。本論文では小説に見られる「日本」表象を丁寧に分析することで、作者白先勇が「日本」を描くことにより、日本統治期からの文化的影響を受けてきた台湾の本省人の生活を如実に描いたことを明らかにした。さらに作者が同時代の東京のゲイタウンを、台北やニューヨークよりもパラダイス的な存在として描いたことで、台湾の読者に台湾とアメリカ以外のゲイライフの可能性を提示していることを指摘した。

第2章「日本にいる台湾「同志」:呉継文『天河撩乱』における日本描写」は、台湾の90年代「同志文学」作家の中で最も日本の影響を強く受けた作家呉継文の『天河撩乱』(1998)に焦点を当て、性的マイノリティの人物設定や、その日本に関する描写を分析した。それによって『天河撩乱』における須永朝彦、吉本ばなな、藤原新也などの影響のみならず、当時の東京が台湾の家庭関係や政治的弾圧から逃げ出すためのシェルター的な存在として描かれたことも明らかにした。

第3章「日本語の「台湾同志文学」の誕生:李琴峰『独り舞』論」は、在日台湾人小説家李琴峰のデビュー作『独り舞』(2017、単行本は2018)における邱妙津、頼香吟を中心とした台湾の「同志文学」の影響を分析し、同作品の「同志文学」的側面、および同作品が日本(語)文学に与え得る影響とその可能性について論じている。ここではレズビアンの主人公が前述2作と同じく、東京を台湾で受けた様々なトラウマからの逃げ場としていることを指摘し、さらに作中で台湾と日本のLGBT運動を比較し、日本のLGBT運動について批判的な視角で描いていることを明らかにしたうえで、本作が日本(語)文学の世界に、邱妙津などの「台湾同志文学」のカノンおよびその文脈を紹介し、国境や言語の壁を超えて日本文学に影響を与えようとした____ことを確認する。

第4章「マレーシア華人系「同志文学」を考える:楊邦尼「毒薬」の「当事者性」論争を手掛かりに」は、マレーシアの華人系作家楊邦尼の、文学賞を受賞したエッセイ「毒薬」(2010)に関わる論争を取り上げる。ゲイとHIV/エイズに関する話題を扱う際、台湾とマレーシアにいかなる違いが見出せるか、またマレーシア華人系文学と「同志文学」という二つのマイノリティ文学は互いにどのような問題を照射するかについて検討した。本論ではまず「毒薬」に関わる論争(「神話はもはや」論争)の事実関係を確認した上で、同時代の台湾とマレーシアにおける性的マイノリティの当事者の状況を確認しながら、「毒薬」本文を分析し、さらに台湾文壇におけるマイノリティ文学に対する偏見、文学賞の「氾濫」が惹起した文学作品の硬直化等について指摘している。不必要な「当事者性」追求することによって、作家、同性愛者、HIV感染者の人格や人権が損われつつある状況とその危険性について論じている。

終章では、各章の議論を通じて浮かび上がった問題を整理したうえで、「ハブとしての台湾同志文学」という概念を提示する。「台湾文学」という枠組み自体が、しばしば弱小国/地域の文学として、「中国文学」あるいは「中国語圏文学」という大きな枠組みの一部に回収されてしまっている。さらにその一部分である「台湾同志文学」もまた、小さな国/地域における極めて限られた人々のための社会運動から派生し形成されたものとされがちであり、国境や文化を超えて連帯の可能性を探ることはそう容易ではない。しかし本論文で論じてきたように、「同志文学」というジャンルは歴史と文化のみならず、フェミニズム、階級問題、言語問題、マレーシア華人、エイズ、在日外国人のスティグマなどの問題を、きわめて意欲的に読者と著者の双方が共有してきた歴史を持ち、今日ではかなり強い発信力をもつジャンルに成長した。「台湾」と「同志」はどちらも生存自体が危うく、自立せざるを得ない要素を共存させているがために、結果として他の地域やジャンルとのイシューやイデオロギーをも超えられる地政学的連帯が可能になったのである。この点を踏まえれば、「台湾同志文学」は、台湾の世界貿易における地理的位置と同じく、ハブ的な存在であるといえるだろう。

その意味において、本論文は「台湾同志文学」というジャンルにおける日本の影響を踏まえた上で、日本のみならずマレーシアなど国境や言語の隔たりを超えて影響を与え合う事例を確認し、台湾「同志文学」の文化的ルーツと影響力を浮き彫りにすることで、その将来的可能性を提示したものである。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	劉　　霊均
論文題目	台湾「同志文学」における日本

要　　旨

本論文は、台湾の「同志文学」を「日本」表象の視点から分析し、そのジャンルが持つ越境と連帯の可能性について考察したものである。

2019年5月、台湾ではアジアで初めて同性婚が法制化された。これは「戒厳令」が解除された1987年頃から、約30年にわたって展開されてきた女性解放運動や性的マイノリティ運動の成果のひとつと考えられる。その背景には「同志文学」という社会性の強い文学ジャンルの影響があった。「同志文学」は性的マイノリティの社会運動と支え合いながら、豊富な文化コンテンツを蓄積し、平等権を獲得することで、他の中国語圏の地域と影響を与え合うようになった。台湾の「同志文学」は、中国語圏の影響を受けながら生成されたものである。また、「戒厳令」の解除後に欧米（主にアメリカ）から輸入されたフェミニズム、ジェンダー理論、クィア理論などの影響も強い。特にアジアより遥かに性的マイノリティに許容的であるアメリカに対する憧れは強かったため、これまで欧米からの影響が多く論じられてきた。

しかし、「同志文学」研究において、台湾の宗主国として50年におよぶ支配を行い、戦後も絶え間なく台湾の文化に広く影響を与えてきた日本の文学と文化の影響は、ほとんど論じられることがなかった。たとえ言及がなされる場合でも、日本は「可視性が低い」とされたり、あるいは「東方」についての描写の一部だと見なされたりしてきたのである。

近年、前述のアメリカからの影響だけでなく、中国女性の同性間の性的欲望や近代中国の男色との関係にも注目が集まっている。しかし日本との関係については、垂水千恵が邱妙津作品と安部公房や村上春樹作品の関係性、および紀大偉の小説と大島渚の映画の関係性についての研究を提出してはいるものの、これまで系統的な研究はなされてこなかった。終戦まで五十年も台湾を植民地として統治し、戦後も様々な文化を台湾に輸出してきた日本が、性的マイノリティの文化という文脈においてだけは欠席するというのは、いかにも不自然である。

本論文では前述した台湾「同志文学」と日本の複雑な関係性に目を向けながら、白先勇、呉継文、李琴峰、楊邦尼という四人の作家の作品を例として、日本表象や日本文学の影響に着目しながら、日本との関係性と、これからの「同志文学」の発展性について考察した。

序章では、まず台湾の「同志文学」というジャンルについて概略的に紹介し、先行研究がいかに日本の要素を等閑視してきたか、さらには筆者がなぜ「日本」に着目するかについて説明している。

第1章「白先勇『孽子』における日本表象：「同志文学」における多文化共生」は、「同志文学」のカノンとされてきた白先勇『孽子』(1983)における「日本」表象について分析したものである。これまで、『孽子』に関する研究は他の「同志文学」研究と同じく、ほとんど中国との関係性およびアメリカの影響を論じることに主眼があった。本論文では小説に見られる「日本」表象を丁寧に分析することで、作者白先勇が「日本」を描くことにより、日本統治期からの文化的影響を受けてきた台湾の本省人の生活を如実に描いたことを明らかにした。さらに作者が同時代の東京のゲイタウンを台北やニューヨークよりもパラダイス的な存在として描くことで、台湾の読者に台湾とアメリカ以外のゲイライフの可能性を提示していることを指摘した。

第2章「日本にいる台湾「同志」：呉継文『天河撩乱』における日本描写」は、台湾の90年代「同志文学」作家の中で最も日本の影響を強く受けた作家呉継文の『天河撩乱』(1998)に焦点を当て、性的マイノリティの人物設定や、その日本に関する描写を分析した。こうして『天河撩乱』における須永朝彦、吉本ばなな、藤原新也などの影響のみならず、当時の東京が台湾の家庭関係や政治的弾圧から逃げ出すためのシェルター的な存在として描かれたことも明らかにした。

第3章「日本語の「台湾同志文学」の誕生：李琴峰『独り舞』論」は、李琴峰のデビュー作『独り舞』(2017、単行本は2018)における台湾の「同志文学」の影響を分析し、同作品の「同志文学」的側面および同作品が日本（語）文学に与え得る影響とその可能性について論じている。ここでは、レズビアンの主人公が前述2作と同じく東京を台湾で受けた様々なトラウマからの逃げ場としていることを指摘し、さらに作中で台湾と日本のLGBT運動を比較し、日本のLGBT運動についても批判的な視角で描いていることを明らかにしたうえで、本作が日本（語）文学の世界に、邱妙津などの「台湾同志文学」のカノンおよびその文脈を紹介し、国境や言語の壁を超えて日本文学に影響を与えたことを確認する。

第4章「マレーシア華人系「同志文学」を考える：楊邦尼「毒薬」の「当事者性」論争を手掛かりに」は、マレーシアの華人系作家楊邦尼の、文学賞を受賞したエッセイ「毒薬」(2010)に関わる論争を取り上げる。ゲイとHIV／エイズに関する話題について、台湾とマレーシアにいかなる違いがあり、マレーシア華人系文学と「同志文学」という二つのマイノリティ文学はどのような問題を照射しあうかについて検討した。本論ではまず「毒薬」に関わる論争（「神話はもはや」論争）の事実関係を確認した上で、同時代の台湾とマレーシアにおける性的マイノリティの当事者の状況を確認しながら、「毒薬」本文を分析し、さらに台湾文壇におけるマイノリティ文学に対する偏見、文学賞の「氾濫」が惹起した文学作品の硬直化等について指摘している。さらに不必要な「当事者性」追求することによって、作家、同性愛者、HIV感染者の人格や人権が損われつつある状況とその危険性について論じている。

終章では、各章の議論を通じて浮かび上がった問題を整理したうえで、「ハブとしての台湾同志文学」という概念を提示する。「台湾文学」という枠組み自体、しばしば弱小国／地域の文学として、「中国文学」あるいは「中国語圏文学」という大きな枠組みの一部に回収されてしまうものである以上、「台湾同志文学」もまた小さな国／地域における極めて限られた人々のための社会運動から形成されたものとされがちであり、国境や文化を超えて連帯の可能性を探ることはそう容易ではない。しかし本論文で論じてきたように、「同志文学」というジャンルはフェミニズム、階級問題、言語問題、マレーシア華人、エイズ、在日外国人のスティグマなど様々なアジェンダを読者と著者が共有する、強い発信力をもつジャンルに成長した。まさに「台湾」と「同志」という生存自体が危うく、自立せざるを得ない要素を共存させているがために、結果として他の地域やジャンルとの地政学的、イシュー的、イズム的連帯が可能になったのである。この点を踏まえれば、「台湾同志文学」は、台湾の世界貿易における地理的位置と同じく、ハブ的な存在であるといえるだろう。

その意味において、本論文は「台湾同志文学」というジャンルにおける日本の影響を踏まえた上で、日本のみならずマレーシアなど国境や言語の隔たりを超えて影響を与え合う事例を確認し、台湾「同志文学」の文化的ルーツと影響力を浮き彫りにすることで、その将来的可能性を提示したと言えるだろう。

以上から本審査委員会は、論文提出者劉霊均が博士（文学）の学位授与に足る資格を有するものと判断した。

主査記載氏名・印	濱田　麻矢

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	濱田　麻矢	副査	准教授	梶尾　文武
副査	教授	朴　鍾祐	副査	立命館大学・教授	三須　祐介
副査	教授	平井　晶子			